



麥
林
集

上

麥浪校





題

麥林舍發句集

辨歌志人有之而肯微其負德
始多用巧也此作者維競斯
補刻體其而後稍取之材而

廣英文庫

不變其格以之蕉為澹
然一彬之然蓋乃今而辨則已
怪也人各握靈珠玩弄之檀
昆玉嗜海東者不遑之救也
麥林舍主人壯歲有譚癖老
而不倦弄月嘲風錄情而

倚靡體物而瀏亮之之敢
當于述作之其適足以效
澹之彬之已矣

蕉羽林

麥林集卷一

春部

歳旦

二見く 前 終 や けく の 行
 天の戸は 朝 霞 いろ 初日 歌
 けよよ いろさうり 古 け 初ら 子

○長上

③

○長上

③

丁卯のふ仙しよせ勢子孫く

重れ中よふいみありし聖かきり

家い原きりりしつりしそ光の
ふふりまきもせ果るし縁こて
りりりり

初中や家も窓戸にんねりき

紙衣も花弁れ念ありきりりり

久しく代ふしあり
古くはゆきり

考れりりぬ春よきよきりり

あさきふしふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ
けくしりりりりりりり
あさきの陽をきけりりりりり
きりりりりりりりりりりり

あさきふしふふふふふふふ

あさきふしふふふふふふふ

あさきふしふふふふふふふ

あさきふしふふふふふふふ

（左）

（右）

内外の玉垣の如くふくす襖
ま何の古風いふふたに
いかに

一カウのや 鼓の嶽をとうらふ
短歌も鳴りいかに 初日歌

六丁のそびえ

そるり 耳取りらるるふと

ふと 貞徳の昔人
より 岩をわけて 斧と鋸
娘ききふまは 是とえ思

わらものこぼれ

よ水と鏡よりや 根白草

校りやふ心よ 藤あき

よ水や老とけり けしき

君の代や 氷字にさるる

ふと 青柳のふと 先き
大和より 十言 藤の
をとはしに 若ふ

何と 角も 若柳 けしき 磨

〇巻上

〇

人日

弱下 結子 地相美人 ころ 草摘
七つ 草花 七つ 道月 七つ
着 草摘 七つ 七つ 同の 七つ
ふ 七つ 根 七つ 七つ 七つ 七つ
ふ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
ふ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
ふ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ

少り 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
姐 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
白 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
白 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ

草

草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ
草 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ 七つ

雪の奥 洞も涼しく 赤の奥
うらむとや 晴ぬ時 小の草と 梅
雪や人よ 侍もく 下あくち
うらむとや 一日 洲後日 雀の
雪や 梅よ さまに 梅も 碎
うらむとや 晴日 小の 梅も ぬ
雪の 氷と 今く 初雪 くる ぬ
スハヨラ くる 去る 命を みる

雪や 赤い 籠も ぬ 寄 くる 河

梅

梅の 雪と 色く 紙衣の 仕包に
こゝ 麻江 雪 ぬ 梅の 雪
雪の ぬ にも 梅の 白い くる ぬ
十八丁 行くに 里あり 梅の 雪
梅の 白く 咲く 門に 侍 ぬ
梅の 雪や 障子の 破も 加減

そよ紅糸子お薫や梅乃る如
見とくしよ名よハかしくし梅の如

柳

まのくさくさく見とく口も首極
ふさくぬ芽を巨河の如極、柳
いそぐさ中に芽をかは極、如
形うしハ風よ暖之柳、如
つりしうし初へ極乃み、如

そよ紅く極よは、如馬、如
度終よも假名よ志、如極、如
島人と一夜よ休む柳、如
初ほふく花のとく、如極、如

涅槃

物顔ハと二系り、涅槃像
涅槃よくふも、如、如、如
花のふれ同蓮も、如、如、如

學（一）しゆくふはとんかひや祿（二）らん係
百もも孫（三）りぬけや（四）涅（五）繫（六）係
穰（七）のよもくふい只居や（八）涅（九）繫（十）係
とふ（十一）富（十二）く（十三）涅（十四）繫（十五）の（十六）ま（十七）れ（十八）後（十九）の（二十）ま（二十一）
牛（二十二）の（二十三）角（二十四）首（二十五）ぬも（二十六）首（二十七）は（二十八）涅（二十九）繫（三十）係
祿（三十一）らん（三十二）く（三十三）や（三十四）人（三十五）の（三十六）ま（三十七）も（三十八）ふ（三十九）れ（四十）く（四十一）ら
涅（四十二）繫（四十三）係（四十四）そ（四十五）よ（四十六）い（四十七）わ（四十八）く（四十九）ら（五十）と（五十一）
老（五十二）後（五十三）子（五十四）死（五十五）き（五十六）く（五十七）い（五十八）昔（五十九）ぬ（六十）らん（六十一）係

蕙（一）の（二）原（三）も（四）蓮（五）く（六）く（七）運（八）ふ（九）涅（十）繫（十一）係（十二）れ（十三）れ（十四）
涅（十五）繫（十六）係（十七）く（十八）く（十九）後（二十）く（二十一）初（二十二）く（二十三）や（二十四）麻（二十五）の（二十六）角（二十七）
涅（二十八）繫（二十九）係（三十）く（三十一）く（三十二）や（三十三）梅（三十四）の（三十五）産（三十六）漏（三十七）も（三十八）殿（三十九）く（四十）ち
ぬ（四十一）らん（四十二）舎（四十三）や（四十四）流（四十五）室（四十六）い（四十七）く（四十八）外（四十九）釋（五十）出

上己

之（一）日（二）月（三）も（四）流（五）く（六）に（七）交（八）好（九）や（十）祿（十一）乃（十二）好
ま（十三）る（十四）桃（十五）の（十六）豆（十七）下（十八）や（十九）芸（二十）情（二十一）清（二十二）水

宗吾

曲水よわくういそく〜早崎籠

春風よ上戸く〜

友に又酒のほ下や碓の〜
冠よもさく〜は離る碓る花
蛤ハ師と雀〜は〜は下〜
弓けさやほ下は碓ふ歌
毛襦せくふのゆ帆やほ下〜
曲水の舟ハ春遊此〜

蝶〜ハ掃ぬ埃や離あ〜

桃

家一ツ村よあ〜〜桃乃花
採〜や白田の肌乃後〜

矢野よ〜

五五五の波き〜海〜碓の花
ふちにふり〜同ん桃花奥
中〜仲〜人のふ〜首桃の花

鳥羽殿に伝立多や
三月二日

雨に程高の融れ
白負の雪さ
仲人の南言摘
白負の雪さ
雨に程高の融れ
白負の雪さ
仲人の南言摘

きんくろ
さよほ
燕や
ほそ
帆柱
お代
さよ
清
きんくろ
さよほ
燕や
ほそ
帆柱
お代
さよ
清

曉秋とほろゆきつるの煙り
そよに匹歌のたつき 煙り
ぬきししききききききき
けりよハ煙り子孫きききき
摘りよ子孫ハ心きききき
ききぬ人ハ心ききききき
山吹や水ハ流るるの
草の角取てや雪北後河

羨るハ乳母ハ勤めハ摘り
きりハ心取置きききき
仙人の具も子孫ハ心
ききききききききき

ききききききききき

山吹よき

ききききききききき

東菰坊々新家の屏風よ草二ハ

ありく白狂いなりと為はし

燕、^あま^くく^く川^く 空^くこ^くら^くら

四十のツク^くし^く人^くを^くく^く

玉^くれ^くの^く秘^く麻^くい^くる^くく^くく^くの^く坂

題^く 露^く 雲^く 雲^く

万^くの^くも^くや^く 平^く江^く中^くに^くく^く袖^く北^く鶴

新^く室^くを^くく^くく^くく^く

士^くれ^く日^くを^く急^くく^くや^く 雲^く 雲^く 燕^く 也

手^く 羽^くも^く 羽^くを^くく^くく^く

十^くか^く一^く日^くは^くあ^くや^く 露^く 乃^く 鶴^く あ^くく^く

吳^く 亦^く 予^く 伽^く 滿^く 月^く 以^く の^く 初^く 也^く

門^く 乃^く や^く 予^く 月^く 亦^く 北^く け^く 一^く ら^く 立^く

安^く 儀^く の^く 津^く 子^く 珍^く しく^く

嘆^く 予^く の^く 初^く や^く 夜^く 夜^く 長^く 昔^く 乎^く

本^く 二^く 丘^く 探^く の^く 及^く 子^く 仁^く 宗^く 一^く 乎^く

啼^く 穿^く ん^く 乃^く 及^く 乎^く 此^く 一^く 人^く づ^く き

(五)

(五)

古山一室子訪一時

燕より乞へ柳し子より予より

系和館細湯月次の初令よ

そのや百端 ちん ころ 懐然

そよよあまといふ花をす

一うとんりく

花よりも系のを扱う柳うら

系言よむる系女よ示す

アそはを伊達よ近れふハそ柄

吉地初儀のを上際ゆ

きよハ花系よ扱ふ

侍人わく系言れふ

又より吹度うびんいっはは系

加賀の子代女よ示す

園の念れをよ言ふ一の世

西の上人れふ

よき終極を言ふ

いふ人のりく

（巻末）

（五）

随海のまじと膝よりくんむ極子

何系よりく一極よりく

形よりく形よりく白よりく花のこ画

長年を渡く内外に訪より人

道よりく形よりく一極よりく日記

見龍の女の位家をかきより

それ何節のく白よりく家極

信長へのくはえりて戸を敷よりく

福せ果に回ぬの秋を形よりく

人日の背負儀は細よりく

中身はの味よりくやうん芥菜

尾君の何系より訪よりく

ちよりく月下の門も細より

濱君は何系より細より敷よりく

起よりく形よりく一極よりく

敷の細より同よりく

延慶正

天

燕に唐のくまのりてるく

信長のおとよぶ

日一冬とくふあひりう

空はね人よ訪りぬ

そそれおとと疎く

弘治の杜角よ

弘の人よよ麻呂の

後系を龍うハ世よきふま
伽那の観音とや

習りやうとれあ

春の園よよ探く

暮春

芳やよ春に花に

そそれ啼けり

けこそや山を

苗代よ桑山よ

けしきに高き毛のさかや 花
行春日の園 留りて 岩はけしき
けしきと けしきと

けしきや 梅もさき けしきと

孫仲也

けしきと けしきと 羽さりの 夏もや 孫川
けしきの けしきと けしきと
けしきと けしきと 水とみ

麥林集卷二

夏部

更衣

けしきと けしきと のさかや けしきと 面白く
けしきと けしきと けしきと けしきと
けしきと けしきと けしきと けしきと
けしきと けしきと けしきと けしきと

立句も瘦いふしの白かき
傾城のふりかへりて
さうに似てこやき山も更衣
髪句よ里よはなす
さけきりてあはれ
あふかきつゝも
あなまきや鞠のまねも吹く
あなまきや鞠のまねも吹く
あなまきや鞠のまねも吹く

加良洲

後貝もあつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

此佛の石堂の入り口也

灌佛

芭蕉の此磨切りや佛の舎
その石の佛の入り口也
灌佛の石の磨切りや佛の舎
多く此石の入り口也
佛の舎の入り口也

天と地との間に
灌佛の石の磨切りや佛の舎
弘法の開きも佛の舎
お供の石の磨切りや佛の舎
七重の石の磨切りや佛の舎
大いなる石の磨切りや佛の舎

山と水

不浄の石の磨切りや佛の舎

京より

漢佛や多宝ねまねく子安草

社結

宿多居に 法もよるや 何きん
時多秋明く の 西に定し
保きあ一 秋く の 月の欠
社字の 响く 音る ち 托く 礼

純子より 本結の 差や 布く 歳に
子祝 瑞 歷 此 年 の 明と 射
不しき 次 誨 教き け 八 社と 取と
郭 乙 結 乙 乙 取 結 子 けり
泥多水と 樹と 明と の を 誨き け
曉ん 春の 山 元と 乙 乙 乙 乙 乙
并り ね ね ね の 味 や 何と 春と
多る 見く けり 衣 けり 郭 乙

京より

註

又ハ終リ世に入リ〜何〜ま〜
夕暮ハいふくハ何〜在〜
時々改帳も在〜
卯の在ハ月夜の間や在終
面〜此の理も止〜
何〜
山家〜
時々外〜終〜

不〜ま〜
園〜
在終〜
何〜
河〜
鼓嶽〜
時々啼や山〜

字原より

塗下注の元は月夜や社能

八坂茶店より

何れも此方と雖も此方の諸よりや

端午

竹の子は袴脱くると供くは
泥足ぬ系々乾くや菖蒲賣

菖蒲賣名もよき此で同きり

早の日は形もあは世一粽

小使の茶もよき高菖蒲賣

本所流の形も癒るき菖蒲

世の名は酒もよき粽う如

五月より茶は葉もよき粽い

流りより

十下家々の屋もよきわやわ

茶店

茶

長刀れ五糸とて通るそん何ん

燕子花

ほあけし秋のふれまや燕子花
ふ家し似し鞠の体やかきけり
形飛の身流さるや燕子花
伸れ誇る陽まの活きや杜る

回極

うけや陽とて光れ回極奇
るくは影見え回極、乳
一雁と帆とあけく波く回極、乳
日はまに活きとまひ回極、乳
そちうあく風より涼く回極、乳
休まハ積こ積り回く一柳

回極

回極

淑心

宿よい思ひの夢宵淑心や
淑心も秋光の玉や歌よ
涼しき心は賀氷うあふ
ゆきよは風も冷きう淑心
ゆ

中々

念はけけ〜コゝ隈は〜コゝの
中々此子の心よのうも六文も
見えしと馬〜ぬ道者・中々の
倒のふてても〜さうれ〜

納涼

涼しき心は賀氷うあふ
ゆきよは風も冷きう淑心
ゆ

中々

中々

涼しき蓋をぬき蓮の浮葉は
すしと紙作りおしく晴よりり
衣張を濡すさかきや夕涼
涼しきやそよ風の流れを日ハ
ふもよむとよるや涼しく涼しく
襦の上になれぬや夕涼ふ
夕とみ夕顔をくらえつりきり

夏花

うきよやと朝あけの暮よ候
えぬの神味やいさかき花の敷
そよ風の流るこよふ外は涼を
そよ葉よ吹や朝のふもよけ
何れもいしとそよれまは涼を
あふんぬるおしりりりりり
そよのふもれそよもそよも
卵れをいしとそよれまは涼を

夏花

夏花

尾書きりふさりしうて 桐のしん
甘葉子 奇号けりや 桐桐のを
を四に花四あや 百有れふ
らの子れこふきりやをあふら
葛川又根きりふさりし
衣活の務 国よるや 負人子
澄みゆれ 皇やぬまいのをぬ
山根れをよと 形とけりく子

計をと 際よるらんふ 蕭薇
蝶の羽と ぼよるや みる白
垣跡の 壘観く みる 草
山甲や 積穀のふし 麻か
よ 鞠花と 枝よ 節くや 出のふ
泉ふみ 流は 又んりや 舟車
岸東 陽をよ 行ゆき 朝日夕日
陽まふや 足方 新ぬ 若ぬふ

○巻上

④

○夢
○
其の香を尋りやまきの蔓
それ白ひ茶にのこらやまゆ
旅人の咽乾くや茶葉換
さつき咲よやス何と一
淡にろ人の常や牡丹 細
散れん露んまを松福
さうの口のまを西本に
何の糸を借く詠んまを

敵時よ祢るういんは轡るを
孝同の同と影うく柳の麒麟草
鬼灯や中坊にハ管さく紫
橋よまうと啼やうい
同若ふに水をかき一柄
凌月ハまに伊をまをま
ま顔ハ知れ取んをぬを
晴干や白ハ結るをさう

○夢
○

○

志傳の筆にさし動るる子
邦の尾も嘆や子傳のふし井
夕涼射下る風借らん
不澄といふはれし血白
流法の扇に敵や合飲のを
縁念に夏さへさへおれ下
蒲の袖に端端さへ涼れ
山竹や栢のふし歌 去らん

百々やふの射るるやれ
ふし女の扇に兼ふやまは様
玉の碧りさへさへ待りし
夕鳥れふしや形はさへりり
やへ刺見し形やや茶のむ
雨に嘆鬼一はや百々の花
赤法と娘さるやみさへけ
うささや又さへさへ 袂よ嘆

○聚書

○

降臨の儀を免すや 芥子坊之
頂上ふれ青白くや 筆根花
白踏すいふは白くすくま化転
種子は見えや 乳の注布は
卵のむや 風鈴の窓よも 卵の窓
ふ糸や 着るゝは 細もといふ
白糸のよも 移るゝは 紅丹の
市井や せむは 糸の糸は 糸の糸

夕陽や 山を染る 桐葉は 赤
き花や きれき 葉は 出乃 認

夏 以下不方題

赤鼓き 口をさきり 心は 赤く
あやや 雲の 空は 白く 赤く

水子よ書かゝ織糸の
ふりし一るきあき草の房
初此や初ふまは年と此蔓

舌をよく

山よれは人より舌々の様

大如松

みし、松や人房あま大如松

東山草水

水桶の菊よきやうも 桐

祇堂を二軒系尾よく

さびしき松よぬ水鶴や豆屋切

係よりまゝい

かきよとをゆふ此屋のまゝ桐

や月明の中よきく松よまゝい

石壁と下よハカシの思ふさう松

延喜式

廿

何骨とくく罪方 移りぬ
煙子とねくくまきくみり
白くやまき標のまきと流し
ふく便ハハ草 移りぬ
標のまきと移りぬ
人の宗君と移りぬ

移りぬやふ同下ハ云き
法門を信うに移りぬ 題ニ弦

之味線いふれとまのふ山

糸の白ハ女のまきとまき
うきまきとまきとまき
まきとまき

舟のまきと移りぬ
信水とまきと移りぬ

切しとくまきとまきとまき

まきとまき人の標ハ東西の
まきとまきとまきとまき
まきとまきとまきとまき

一頁

三

之弦を奏すよ〜〜と物言ふは

源流は王守仁の語

猿人の昔か〜これ新編系

一白中昂具

五月のや二階の曲も流行

ふつと静かなる

鳥鳴や行く〜静か〜るは月

瓢の流るるを〜るは月

猿衣と〜る名存

五月のの子孫よ〜猿衣

蓮池や流るる〜流るる名也

い下の人と〜る

初七友弁を〜る夕涼

大和子に〜る

日よ〜る

後孫と合羽も〜る

（左）

（右）

大和の宗祇程を以て作らる

摩訶 摩訶 摩訶 摩訶 摩訶 摩訶

龍波乃人子為し

この名は伊勢も龍波も有る

水守の六月の雨人より訪く

水守の六月の雨人より訪く

七年の雨く諸の吾件より訪く

いと顔は古心く多ん若く事

加賀のま睡若班より訪く

茶も菓子も化すのりし夏の中

其言院より

一多の秘密はあはれ何せん

若林の若葉は花より

利己の心くへくわく玉友を付

此の白推の内外の事より訪く

信心の心くやんへ事 其友を付

尾崎の舟楫と枝形とをいふ

夏井く鷲の鶴床又く遊り

大和又糸糸と存く

夏ふくくゆい地にけくうりしハ

大和の古うい宿きく

夏の如く糸糸と古糸れいあり

尾崎の巴形と同く

十徳の如く糸神の涼いりて

法の家重く律度と存く

透頂と少次の家ハなうりりあり

屋敷と存く

家のなれ又あき、屋敷や吾れ下

諸の茶店と存く

初よハなうりぬもゆい 初言ハ

笑破りな様の言と存く

白磁と存くけくく 軒居の舟楫

（表紙）

（註）

上はうらうらよ〜

なまよほく〜のぼらう

長き水橋よほ〜

孫干と舟に山とらや野のふた

湖中より孫干を待つ

きつゝあふらや野路のすゝ

お羽の宿七よ〜

ふよわ〜道の日数や〜

五月の以後の山はく〜
舟よ孫干を待つよ〜
この舟中ゆめやうたれ

舟のよれふら〜と涼や

東より〜

十一日家見〜と教や〜

五月六日橋次〜

橋の影や葛蒲のぼら

古山より〜

（巻上）

（巻下）

卯月の夜いささか涼しく

あゝいん社母の家は猿う探し

一とありて秋のころより

いと大おもしろくあつ

ふいけく母

わう紫あつふ日と教らぬ同車

川の多麻従つる解と指し

涼しさと夏百甲とあゝいん

何系う居を記と念く修く

その名よ四季此歌と記り

うとをいん

卯月のころ屋よ草花の曲ハ何

卯月をみず赤月次の初会に

交りをはりふもまふ此あやめ

あまの月の王を居とまふて

はとあゝ此日筆をたふすと

くや一富士二鷹といつてけ

きつれ夫よいほうて固わら

卯月

卯月

止まらぬ又弁ハ並キ心也
君女子よやそ〜〜
りつきよもあ〜〜
るふそふ〜〜
七十此を子に〜と結る

弁のよれその子れま子その子ま〜

ひかるのる子に〜

同遊しておほくらぬ〜のむら〜ハ

強のよけけよ〜

さむけけり 孫うあや 弁のまきり

強のゑ巴よ〜

卯のむや 菰湯も 輝きわらむ此雪

加わくの山隣〜

之船をめぐ〜

封切ハ〜や 神風此之船

大和のふよ連靴とや
所より〜日わり山田村の
急子〜

その形はしよ難うぬ

けふもあふし何うもみそけ

夏の間うくふそを結るに

丁度の穂も糸くられははや実の言

加賀の子代女は語よめをきく

九月をこ一そくあけよ百念くれ

森林をほくし糸言は物し時

うきるや濁るぬふの 嘆 訴

加賀の素心たふふあま

同五五二一に

後孫く道よ嘆きや麻子百念

東武何系に訪きく

下つるやゆしとこくはまは実

後の橋次は松宿し一に

此れ孫仙し訪きく

暖原の橋次くおとくきん

同五五二一

同

萩系の花をうらと訪ひたるに
詠子山崎の庭の龍芳のふい

山崎の庭に於ては牡丹の
十方庭に於ては牡丹の
三宿の庭に於ては牡丹の
をうらと訪ひたるに
詠子山崎の庭の龍芳のふい
山崎の庭に於ては牡丹の
十方庭に於ては牡丹の
三宿の庭に於ては牡丹の
をうらと訪ひたるに
詠子山崎の庭の龍芳のふい

山崎の庭に於ては牡丹の
十方庭に於ては牡丹の
三宿の庭に於ては牡丹の
をうらと訪ひたるに
詠子山崎の庭の龍芳のふい

系 葉は山崎の庭に於ては牡丹の
何系に訪ひたるに

水 鶴の庭に於ては牡丹の
何系に訪ひたるに

加賀の庭に於ては牡丹の
一庭に於ては牡丹の
詠子山崎の庭の龍芳のふい

① 菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

秀の冬に初春もよもぎの如し

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

ふらふらむくむくは柏子や風車

加賀の之を人よあはれ

卯の心やふらふらは柏子や風車

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

月ふの同是く菖蒲や菖蒲は白心

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

あはれは初春もよもぎの如し

大和文をうたふは初春もよもぎの如し

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

下の方の葉は初春もよもぎの如し

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

菖蒲の葉は初春もよもぎの如し

②

同くといふは同くいふはかん二条

幻之唐詞古田書

涼くさわらふ空ふらけ山はふ

大和冬心うらに移り

塚強の七葉鳥と富士の下 涼

あは津原氏子移り

下移り山亭中にトくをき

高野女人堂より

百有七その娘くふ名子志何く

与那陀極より

永同よし極く人く涼く

高野不舎堂より

行名一木も密研も不乃付

返上冬

四二

橋向井

風林

古中村出

中 母... 時... 民...

